

## イギリス産業革命と下層階級<sup>\*1</sup>

山崎 有介<sup>\*2</sup>

### THE LOWER CLASS UNDER THE INDUSTRIAL REVOLUTION

Yusuke YAMAZAKI<sup>\*2</sup>

#### 《1》

### 目 次

#### はじめに

#### (1) 少年（小学生と浮浪少年）

- ・学校と家庭

#### (2) 煙突掃除の少年

- ・理想と現実

#### (3) 黒人の子供たち

- ・イギリス人とアフリカ人

#### (4) 娼婦たちの叫び

- ・虐げられた女性と性病、そして死する胎児

---

<sup>\*1</sup> Received November 10, 1994    <sup>\*2</sup> 長崎ウエスレヤン短期大学助教授 Department of Culture,  
Nagasaki Wesleyan Junior College, Isahaya, Nagasaki, Japan 854.

## ☆ はじめに

ユダヤ商人シャイロックは、シェークスピアが『ヴェニスの商人』の中で描いた悪玉ではあったが、15世紀のヨーロッパ社会に生きる悲しいユダヤ商人の姿であった。舞台は大航海時代のイタリア。しかしながら、16世紀から18世紀にかけてのイギリスの貧しい労働者階級の姿によく似ている。既に、イギリス社会の中に人種差別や宗教の違いによる差別の意識が問題化されていたのである。その後、階級差別や基督教の宗派観の違いを切っ掛けに市民革命が展開されていくのである。ところが、男女差別や労働者問題などの庶民に直接関わる問題意識の開眼は18世紀から19世紀にかけて産業革命が最も盛んになり、西欧社会が一丸となって市民革命を勃興させる頃になって漸く大きく取り上げられるようになるのである。哲学者たちや経済学者たちが時代の良きアドバイザーであったことは勿論のことであるが、芸術家たちも時代を反映した作品を創造し、精神的に、時には肉体をはって市民革命に参加していたのである。特に、イギリス・ロマン派の詩人たちは革命に揺れ動くヨーロッパ社会の中で、詩を通して本来あるべき人間の姿を追求し、人生を謳歌していた。ワーズワースやコールリッジは悠久の昔から繰り返されてきた自然の営みを見つめ、人間の営みとを照らし合わせながら作品を描き、一方では、フランス革命に期待を寄せていた。キーツは恋愛と病苦の中から人間の性(さが)を抒情詩や叙事詩にまとめあげた。計り知れない人間の生命力をダイナミックに表現しようとしたシェリーは己の才能の限界へと挑んだ。自らをドン・ジョバンニと称するバイロンは、“呪われた詩人”と非難されながらもギリシャの独立戦争を支援し、肉体を捧げ、病死ではあったが情熱的な最期を遂げたのであった。

ところが、これらの詩人たちはいずれもある程度の地位のある者たちであり、産業革命の下で苛酷な生活を強いられていた労働者階級の人々を身近に感じるにはあまりにもエリートと言うべき存在の詩人たちであった。ところが、一介の靴下商人の長男として生まれたウィリアム・ブレイクは、

労働者階級の人々を間近に見つめながら、生涯ロンドンの貧民街で過ごし、労働者階級の子供達や浮浪者、売春婦たちの悲惨な姿を描いたのであった。この『イギリス産業革命と下層階級』では、ブレイクの作品からイギリスの様々な下層階級の人々を描いた詩を取り上げながら産業革命下のロンドンの人々の生き様について述べてみたい。

## (1) 少年

## ・小学生と浮浪少年

産業革命下の18世紀という時代は、特に政治と文化を切り離して考えることができない時代である。産業ブルジョワジーの価値と態度を反映しない支配階級の文化としては、産業革命以前と同一視することがもてはやされるようになる。爵位・身分・階級区分が重視され、実力主義平等主義的体制が阻害されるようになる。すると、労働運動を促したり、平等主義を助長するような文化意識が高まると同時に、労働意識への敵対心が生まれるようになるのである。

一方、学校教育に関しては、17世紀における異常なほどの学校の発展があり、家族の道徳的で精神的な機能を主張し、子供の身体と魂の両方の形成に重大な関心を示すようになる。そうした中で、学校は次第に厳格になり規制の体制に子どもを閉じ込めるようになっていくのである。最下層の受刑者にしか与えられなかった鞭打ちや心理的および物理的な独房や懲罰などを子どもにも課するようになっていくのである。すなわち、子供の自由な考え方を狭める要因を築いていると言えよう。

また、家庭における親と子供との関わり方は、人口の状態からも明確に表れている。今日の先進国の人口は「少産少死」という意味で、おおよそ「人口の安定状態」を保っていると言えるが、16～17世紀のイギリスの人口も「多産多死型」と言う形で「安定状態」を保っていた。特に、版画や美術表現において、「死の舞踏(dance macabre)」；「恋人たちを襲う死」；「死と子ども」；「死と母親」と題される作品などに描かれている。死は常に弱い者、子どもをねらって襲いかかった。死の

恐怖と警戒を物語っているのである。したがって、子どもに対して将来の期待感を抱いたり、特別な感情投射をおこなうことが少なかったのである。子供が、ある程度成長すると、歩いて1、2日ほどで他人の家に里子に出され、大人同様の扱いを受け生活訓練を受けた。イギリスでは子供を、7～9歳までしか自分の家で育てず、それから7～9年間、他人の家で苛酷な奉公につかせるのが一般であった。貧しい労働者階級の子供となればなおさらのことである。生家における溺愛を防ぐために里子とか徒弟に出すのが賢明だと考えられていた。中産・下層階級の場合、子どもの労働力を必要とするライフ・サイクルにさしかかっている家庭にひきとられた。最低限の衣食住の条件が保証される代わりに厳しい労働収奪に耐えなければならなかった。余剰人のかかえるライフ・サイクルにさしかかっていた家庭では、里子に出し、家族数の調整を図った。こうして養育負担の軽減を行ったのである。すなわち、子供の死亡率が高かったためである。劣悪な栄養補給と苛酷な労働収奪や性的虐待を行い、肉体的にも精神的にも虐待したのである。「子どもは消耗品」とまで考えられた。

産業革命とともに、都市化が活発になると、ライフサイクルにもバランスの擦れが生じるようになる。やがて出産数が死亡数を上回るようになるのである(1810年ピーク)。当然、孤児の数も増えることになる。ウィリアム・カドガン(William Cadogan)が、1741年に創設したロンドン孤児院は、たった4時間で満員になったという。孤児となるものは、必ずしも下層階級の子供というわけではなかった。乳幼児の劣悪な生育環境や社会対策の遅れが原因していたのである。家内工業においては、浮浪者が低賃金で働かされ、苛酷なまでの労働収奪を強いられていたのである。かのバートランド・ラッセル(Bertrand Russell)が「ナポレオンはロシアの雪とイギリスの子どもたちに敗北したのだ」と言ったように、産業革命下におけるイギリスの子供達は、あまりの悲惨さゆえに憐憫さを誘うという意味で大きな役割を担っていたのである。

### The School-Boy

I love to rise in a summer morn,  
When the birds sing on every tree;  
The distant huntsman winds his horn,  
And the skylark sings with me.  
On, what sweet company!

But to go to school in a summer morn,  
O! it drives all joy away;  
Under a cruel eye outworn,  
The little ones spend the day,  
In sighing and dismay.

Ah! then at times I drooping sit,  
And spend many an anxious hour,  
Nor in my book can I take delight,  
Nor sit in learnings bower,  
Worn thro' with the dreary shower.

How can the bird, that is born for joy,  
Sit in a cage and sing?  
How can a child, when fears annoy,  
But droop his tender wing,  
And forget his youthful spring?

O! father & mother, if buds are nip'd,  
And Blossoms blown away,  
And if the tender plants are strip'd  
Of their joy in the springing day,  
By sorrow and cares dismay,

How shall the summer arise in joy,  
Or the summer fruits appear?  
Or how shall we gather what griefs destroy,  
Or bless the mellowing year,  
When the blasts of winter appear?

小学生

(訳)

夏の朝に起きるのはとてもすきだ。

鳥たちはみんな木にとまり、囀る。  
遠くの獵師は角笛を吹き鳴らし、  
ヒバリは僕と一緒に歌う。  
おお、なんとすばらしい仲間たちなのか！

でも、夏の朝の学校は  
もう、うんざりしてしまう。  
陰険な目に睨まれて、  
こどもたちは一日を過ごす。  
ため息ばかりでるし、落ち込んでしまう。

ああ！ うなだれて座ってることもしょっちゅう  
だし、  
ただただ、つまらない時間ばかり過ぎて行くし、  
教科書を開いたって、おもしろくないし、  
学び舎にいるなんてもんじゃない。  
やるせない罵倒を浴びながらどうにか時間が過ぎて  
行く。

鳥が、喜びのために生まれるなら、  
鳥籠に入れられて、どうやって歌が歌えるという  
の？  
子どもが、恐れによって気が怯むなら、  
優しい翼をうなだれて、  
若さ溢れる春をどうやって忘れられようか？

ああ 父さん、母さん、  
悲しいことに情け容赦なく、  
すがすがしい春の日に喜び溢れ芽を出す。  
蕾が摘まれ、花が吹き飛ばされ、  
やさしい草木が刈られてしまったら、  
  
楽しい夏はどうやって迎えられるの？  
おいしい夏の果物はどうやって実るの？  
悲しいことや苦しいことはどうやって忘れられる  
の？  
その年をどうやって「いい年だった」って感じた  
らいいの？  
冬の吹雪がやって来た時に。

ピューリタン革命、名誉革命などのイギリスの  
市民革命が相次ぐ中で、同時に子供に対する教育  
への意識も高まっていった。あたかも、子供への  
教育が地位への向上であるかのように。やがて、  
産業革命の勢いが高まると特に大富豪と称する商  
人たちは世界各地のイギリス植民地獲得の中で、  
多大な利益を手にし、社会的な地位も高めていっ  
たのである。貴族や地主の長男は、後継ぎにする  
ために、次男以下は軍人への道を歩ませようと教  
育していたのである。通常、学校は教育費の払え  
る家庭の子供達のために開設され、下層階級の子  
供達には程遠い存在のものであった。また、必要  
なものであるという意識とも無縁のものであった  
のである。ただ、普段、教育が受けられない労働社  
会階級の貧しい子供達のために教会が「日曜学校」  
を開いてはいたが、遊び盛りの子供達にとって、  
「勉強をする」という事と「生活をする」という  
事の重要性は、明らかに後者へ置かれたのである。  
一方、学校や教会は親身に子供への教育を施すの  
ではなく、既成の倫理観に固執し、更に、利益主  
義へと走り、教育とは程遠い場となっているので  
ある。次に挙げてある“THE LITTLE  
VAGABOND”（「浮浪少年」）もそんな社会背景  
の中から浮かび上がってくる存在である。

#### The LITTLE VAGABOND

Dear mother, dear mother, the church is  
cold;  
But the ale-house is healthy and pleasant  
and warm.  
Besides I can tell where I am used well;  
Such usage in Heaven will never do well.  
  
But if at the church they would give us  
some ale,  
And a pleasant fire, our souls to regale,  
We'd sing and we'd pray, all the livelong  
day,  
Nor ever once wish from the church to  
stray.

Then the parson might preach and drink and  
sing,  
And we'd be as happy as birds in the  
spring;  
And modest dame Lurch, who is always at  
church,  
Would not have bandy children nor fasting  
nor birch.

And God, like a father rejoicing to see  
His children as pleasant and happy as he,  
Would have no more quarrel with the devil  
or the barrel,  
But kiss him and give him both drink and  
apparel.

#### 浮浪少年

(訳)

母ちゃん、母ちゃん、教会は冷たいぜ。  
それに比べりゃ、飲み屋は健全だし、陽気で情に  
厚いんだ。

それに、おいら、心地いい所だって知ってるよ。  
天国みたいな仕来りじゃ、生きた心地はしないぜ。

でも、もし教会で酒をめぐんでくれたら、  
もう最高だぜ、体中が痺れちまうぜ。  
一日中、歌ったり、祈ったりしてさ、  
教会に入り浸りになっちまうかもね。

そうすりゃ、牧師さんだって飲んだり歌ったりし  
ながら説教できるし、  
おいらたちだって春の小鳥みたいに幸せになるっ  
てものよ。  
教会にはいつも来てるけど、金のことしか頭にない  
ような上品ぶったお婆さんだって  
ひねたガキなんかほしがらないだろうし、断食だっ  
て、樺の鞭だっていらなくなるさ。

父ちゃんのような神様だって見りゃ喜ぶに決まっ  
てるさ。

自分と同じように陽気で幸せな子供たちを見りゃ  
ね。  
神様だってこれ以上、飲んべーの悪魔と喧嘩だっ  
てしないだろうし、  
しかも悪魔にキスしてあげたり、うまい酒ときれ  
いな服だってやるかもね。

自由を奪われてしまった子供の欲求不満の解消  
法は、さまざまな点で表れることになる。教会と  
いう厳かな形式の権化とでも言うべき場が、社会  
的には信頼され、保証されていながら、子供にとっ  
ては何の得にもならない所と化しているのである。  
教会が人々の欲求を満たしてくれる快い天国のよ  
うな所であったならと、誰もが望むことである。  
それを飲んべいたちが集まる酒場のような教会が  
望ましいんだと、皮肉たっぷりに歌い上げている。

#### (2) 煙突掃除の少年

##### ・理想と現実

The Chimney Sweeper (*Songs of Innocence*)

When my mother died I was very young,  
And my father sold me while yet my tongue  
Cold scarcely cry, 'weep 'weep 'weep 'weep!  
So your chimneys I sweep, and in soot I  
sleep.

There's little Tom Dacre, who cried when  
his head,  
That curled like a lamb's back was shaved;  
so I said,  
'Hush Tom, never mind it, for when your  
head's bare,  
You know that the soot cannot spoil your  
white hair.'

And so he was quiet, and that very night,  
As Tom was a-sleeping, he had such a sight!—  
That thousands of sweepers, Dick, Joe, Ned,  
and Jack,

Were all of them locked up in coffins of  
black.

And by came an Angel who had a bright  
key,

And he opened the coffins and set them all  
free;

Then down a green plain leaping, laughing,  
they run,

And wash in a river, and shine in the sun.

Then naked and white, all their bags left  
behind,

They rise upon clouds and sport in the  
wind;

And the Angel told Tom, if he'd be a good  
boy,

He'd have God for his father, and never  
want joy.

And so Tom awoke, and we rose in the  
dark,

And got with our bags and our brushes to  
work.

Though the morning was cold, Tom was  
happy and warm;

So if all do their duty, they need not fear  
harm.

煙突掃除の少年（「無垢の歌」）

（訳）

母さんが死んだ時、僕はまだ幼かった。

それでも父さんは僕を売っちまった。

「煤ソーजू、煤ソーजू、煤ソーजू、煤ソー  
जू、！」てな具合にちゃんと言えないの  
に、

僕は煙突掃除をして、煤まみれで眠るのさ。

そう言えば、トム・デーカーという子がいたっけ。  
仔羊の背中のような巻き毛の頭が剃られちまった

時、泣いてたんだ。

だから言ってやった、「元気だせよトム、くよく  
よしたってしょうがないよ、  
頭がツルツルだったら、あのきれいな白い髪が汚  
れなくてすむじゃないか。」

すると、トムは落ち着いた。その夜、  
彼が眠りにつくと、こんな夢を見たー  
何千人もの煙突掃除の子ら、ディック、ジョー、  
ネッド、それに、ジャックらが黒い柩に閉じ込め  
られている。

輝く鍵を持つ天使がそばにやって来て、  
みんなを柩から解放してやり、自由にしてやった。  
すると、みんなは緑の平野を跳ねたり、笑ったり  
しながら、走り、川で体を清め、日に照らされて  
輝いた。

やがて、服を脱ぎ捨て、真白な体を露にし、袋を  
みんな後にして、  
雲の上に立ち上がり、風にまみれて戯れた。  
すると、天使が言った、もしも彼が良い子であつ  
たら、  
お父様のように神様を思うことでしょう。決して  
喜びなんか望まないでしょう。

そして、トムが目覚めた。まだ真っ暗な時間に僕  
らは起きて、  
袋に煤刷毛を背負い仕事に向かうんだ。  
その日は寒かったけれども、トムは元気で朗らか  
だった。  
みんなが自分の務めを果たせば、どんなことだつ  
て平気なんだ。

この詩は、まだ明確に言葉が言えない幼い子供  
までが苛酷な労働を強いられていたことを象徴的  
に描いたものである。労働者階級の子供たちが丁  
稚奉公に出されるのが当たり前であった時代とは  
言え、親と子供の絆が軽視されていたことを物語っ  
ている。奉公に出されることで家族の安堵が約束  
されるのであればまだ救いようもあるが、家族の

ためというよりも親の身勝手な都合や片親、特に父子家庭においては子供を養おうという心持ちもなかったことが窺える。この詩では、そんな苛酷な生活を強いられながらも、前向きに生きようとする少年の健気な姿が描かれているのである。そしてまた、ブレイクは『経験の歌』では次のように煙突掃除の少年に語らせている。

The CHIMNEY SWEEPER

(Songs of Experience)

A little black thing among the snow  
Crying 'weep, 'weep in notes of woe!  
Where are thy father and mother, say?  
'They are both gone up to the church to  
pray.

'Because I was happy upon the heath  
And smiled among the winter's snow,  
They clothed me in the clothes of death  
And taught me to sing the notes of woe.

'And because I am happy and dance and  
sing,  
They think they have done me no injury —  
And are gone to praise God and his priest  
and king,  
Who make up a Heaven of our misery.'

煙突掃除の少年（「経験の歌」）

（訳）

小さい真っ黒なものが雪の中で叫んでいる、  
「ソージュ、ソージュ」と悲しい声で。  
君の父さんと母さんはどこへ行ったんだい？  
「二人とも教会へお祈りに行っちゃった。」

「僕は、荒野でも元気だし、  
真冬の雪の中でもへっちゃらなので  
父ちゃんと母ちゃんは真っ黒な死人の服を着せて  
この悲しげな歌を覚えてくれたんだ。

それに、僕は陽気に踊ったり歌ったりしてたから、  
僕が傷ついてるなんてまったく思ってもいないんだ。

だから、二人とも僕らの惨めな天国を作ってる  
神様や神父さんや王様を拝みに行っちゃったんだ。

『無垢の歌』の場合とは違って少年には両親がいる。この両親は一応敬虔なクリスチャンということらしいが、子供に対する愛情は疎遠なものとなっている。また、両親に仕込まれた“悲しみの歌”「'weep, 'weep」は、ロンドン訛りではあるが、発音の不完全さ（“sweep”〈掃除〉→“weep”〈泣く〉）がいっそう悲惨さと残忍さを誘うものとなっているのである。

(3) 黒人の子供たち

・イギリス人とアフリカ人

17世紀初頭からヨーロッパの主要国が植民地獲得にのりだし、その中でも一番勢力を拡大していたイギリスは植民地における生産拡大に伴って1660年頃から西アフリカの黒人奴隷を大量に輸入し、経営をさらに拡大していった。こうして、17世紀後半から18世紀にかけて、イギリス本国→西アフリカ→西インド→イギリス本国という三角貿易が形作られた。1631年、アフリカに奴隷貿易の拠点(ガムビア)を獲得し、1713年にはユトレヒト条約によってスペインからアメリカに対する黒人奴隷供給の独占権を獲得したことにより、奴隷貿易はその後砂糖取引とともにイギリスの植民地利潤の最大の源泉となったのである。だが、その後、市民革命による階級差別への批判が生じる中で、黒人問題への関心はやや出遅れたものの芸術家やジャーナリストたちによって徐々に高まっていった。次に挙げる詩もそうした状況の下で必死に生きる黒人の親子の姿が描かれたものである。

The Little Black Boy

My mother bore me in the southern wild,  
And I am black, but O! my soul is white;

White as an angel is the English child,  
But I am black, as if bereaved of light.

My mother taught me underneath a tree,  
And, sitting down before the heat of day,  
She took me on her lap and kissed me,  
And, pointing to the east, began to say:

'Look on the rising sun, — there God does  
live,  
And, gives His light, and gives His heat  
away;  
And flowers and trees and beasts and men  
receive  
Comfort in morning, joy in the noonday.

'And we are put on earth a little space,  
That we may learn to bear the beams of  
love;  
And these black bodies and this sunburnt  
face  
Is but a cloud, and like a shady grove.

'For when our souls have learned the heat  
to hear,  
The cloud will vanish; we shall hear His  
voice,  
Saying, 'Coming out from the grove, My  
love and care,  
And round My golden tent like lambs  
rejoice.'

Thus did my mother say, and kissed me;  
And thus I say to little English boy.  
When I from black and he from white cloud  
free,  
And round the tent of God like lambs we  
joy,

I'll shade him from the heat, till he can  
bear

To lean in joy upon our Father's knee;  
And then I'll stand and stroke his silver  
hair,  
And be like him, and he will then love me.

# 黒人の少年

(訳)

母さんは南の<sup>あれの</sup>荒野で僕を産んだ。  
僕は肌は黒いけど、魂は白い。  
イギリスの子は天使のように肌が白い。  
でも、僕は、光が失せたように肌が黒い。

母さんは木の下で僕にいろいろ教えてくれた。  
また、厚い日の光を浴びながら腰を下ろし、  
僕をひざに腰掛けさせて、キスをしてくれた。  
そして、東を指さし、こんな具合に話をしてくれ  
た。

「あの日の出をごらん、 — あそこに神様が住  
んでいらっしゃるのよ。  
光を恵んでくださり、暑さを分け与えて下さるの。  
花や木や動物たち、それに人間までもが  
朝になると快くなり、昼には喜びが与えられるの。

私たちはこの地上のほんの小さな所にいるの。  
だから、愛の輝きに十分耐えられるのよ。  
この黒い身体と日焼けた顔は  
雲のようなもの、木陰となる森のようなものなの  
よ。

と言うのも、私たちの魂は暑さに耐えられるよう  
になってるの、  
雲は消えると、あの方のお声を耳にするの、  
『森から出ておいでなさい、私の愛する大切な子  
よ、  
私の庭の幕屋のまわりで、子羊のように戯れなさい。』

このように、母さんは話をし、キスをしてくれた。  
僕は、これをイギリスの子に話してやるんだ。



僕は、黒い雲から、彼は白い雲から自由になり、神様の幕屋のまわりで、子羊のように戯れる。

僕は彼を暑さから守ってやると、彼は安心して喜び勇んで、父なる神様の膝にうなだれることができるんだ。

すると、僕は立ち上がり、彼の銀色に輝く髪を撫でてやる。

やがて、僕は彼と友達になって、彼は僕を大好きになってくれるんだ。

『無垢の歌』の中で歌われるこの「黒人の少年」は現状批判をしたりはしない。あくまでも黒人であることを認識したうえで、自分の役割を見つけだしている。皮膚の色は雲の色であり、木陰の色であると認識する。白人の子どもに使われるのではなく、自分の方から守ってやるのが務めであることを悟るのである。先に述べた「煙突掃除の少年」(『無垢』)と同じ類いのものである。

#### (4) 娼婦たちの叫び

##### ・虐げられた女性と性病、そして死する胎児

15世紀から16世紀のヨーロッパにセックス観の大きな変化をもたらしたのが、キリスト教の宗教改革と梅毒の蔓延だった。売春婦たちへの統制の手はいよいよ強まっていく。禁欲への解放はプロテスタントの聖職者たちによってなされた。一般的な結婚や性の問題は、16世紀の宗教論争や文学の中では重要な問題にならなかった。

カルビンは、結婚は生殖よりもその社会的な意義が重要であると説き、女性は男性の協力者であるとして、売春の撲滅を提唱した。一方、ルターは、女性は子を産むものであり、男性の性欲を満足させるために神が与えた道具であると説いた。『売春宿に関する一考察』で聖アウグスティヌスの《売春》に対する考え方を通して、重大な罪を防ぐ手段を批判し、「女性は妻となり母となることが務めであり、売春婦になることは許されない」と述べた。悪魔が売春婦を送り込み、若者を墮落させるのだと考えていたのである。そして、《売

春》、《強姦》、《姦通》の処罰を知らしめたのであった。

18世紀において、売春の罪ありとされた女は、まず、市庁舎にひたてられ、そこで、刑の執行人によって後ろ手に縛られたうえ、鳥の羽飾りのついた円錐型の帽子を被せられた。さらに、洋服の背中にも、売春婦であるしるしがつけられた。その後、街の中を引きまわせられ、市民がぞろぞろついて行き、嘲りの言葉を浴びせる。執行人は助手の手を借り、女を川のまん中に突きでた岩の上に運び、衣服を脱がせ、鉄の檻に押し込み溺死寸前まで川の中に3度漬け、岩の上に放置し、あげくの果てに晒しものにしたのであった。その後、私設の救貧院で残りの刑期を勤めることになるのである。

London

I wonder thro' each chartered street,  
Near where the chartered Thames does flow,  
And mark in every face I meet  
Marks of weakness, marks of woe.

In every cry of every man,  
In every infant's cry of fear,  
In every voice, in every ban  
The mind-forged manacles I hear.

How the chimney-sweeper's cry  
Every blackening church appals;  
And the hapless soldier's sigh  
Runs in blood down palace walls.

But most thro' midnight streets I hear  
How the youthful harlot's curse  
Blasts the new-born infant's tear,  
And blight with plagues the marriage  
hearse.

ロンドン

(訳)

特権ある街並を通り、  
特権あるテムズ川沿いを彷徨うと、  
あらゆる人の翳りに出会う。  
弱さと悲しみという翳りに。

あらゆる人のあらゆる悲しみ、  
あらゆる小児の恐怖への泣き声、  
あらゆる声に、あらゆる圧迫に、  
捏造された精神の束縛を耳にする。

いかにして、煙突掃除の呼び声に  
あらゆる荒廃した教会がぞっとし、  
哀れな兵士のため息で  
宮殿の城壁が血みどろになったことか。

しかも、毎日のように真夜中になると  
若い娼婦の呪いの声を耳にする。  
生まれたばかりの幼子は涙する間もなく、  
疫病のために結婚とは程遠い霊柩車で墓場行き。

The Sick Rose

O Rose! thou art sick!  
The invisible worm,  
That flies in the night,  
In the howling storm,  
Has found out thy bed  
Of crimson joy;  
And his dark secret love  
Does thy life destroy.

病める薔薇

(訳)

おお、薔薇よ！ お前は病んでいる！  
目に見えない虫が  
吹き荒ぶ嵐の中を  
夜中に飛んで来て、

深紅の喜びに溢れた  
お前の住処を見つけ出した。  
その陰鬱な秘密の愛は  
お前の生命を奪うのだ。

Ah! Sun Flower

Ah! Sun-flower, weary of time,  
Who countest the steps of the sun;  
Seeking after that sweet golden clime,  
Where the traveller's journey is done;

Where the Youth pined away with desire,  
And the pale Virgin shrouded in snow,  
Arise from their graves, and aspire  
Where my Sun-flower wishes to go.

向日葵

ああ！ 向日葵よ、時に飽きても  
太陽の足取りを数え、  
あの甘美なる黄金の地を追い求める。  
旅路の果てのあの憩いの地を。

若者は欲望の果てに疲れきり、  
青ざめた乙女は雪の経帷子を纏う。  
二人はやがて墓から目醒めると、  
向日葵の求める地へ望みを繋ぐ。

この3つの詩には、なんらかの形で娼婦の姿が描かれている。『ロンドン』では、疫病に病む妊娠した娼婦の姿が、『病める薔薇』では、社会的に蔑まれた地位にある女性が通常の恋愛という形ではない男女交遊により、〈女性〉となっていく姿が描かれている。また、『向日葵』では、欲望を抑え切れない若者が、一人の若い娼婦と出会った末に禁断の恋に落ち、心中し、あの世で結ばれようと望んでいる光景が描かれている。その他様々な解釈も成り立つが、はっきりしていることは若い女性が社会的に追い込まれ、あげくの果てに死を選ばざるを得ない、ということである。そして、

こうした状況が特別なことではなかったという事である。

イギリスでは、ロンドンの公開の催し物や祝祭、教会、劇場、公園などで、売春行為がなされていた。また、クレスウェル夫人の家(『イギリスのならず者』リチャード・ヘッド著)などの売春宿が流行し、ロバート・バートン著の『憂愁の解剖』には、15、16の少年でさえ淫売宿の経験があったと記されている。そこでは下層階級の女性が恰好の餌食とされ、低賃金で雇われていた。今日用いられる“harlot”という単語は、本来“旅回り芸人”を指す語であって、16世紀ごろから「売春婦」という意味で用いられるようになった。旅芸人女性たちは芸を売るだけでなく、己自身の身を売ってまで生活の糧を得る必要があったからである。18世紀には、当然のごとく、売春の増加に比例し私生児も増えることになるのであった。

一方、「下層階級の女性はいふだら」と上流階級が性と階級を批判していたことも事実である。1839年、ロンドンの売春婦の数は、およそ8万(マイケル・ライアン推定)であるとされる。女性の数が76万9,628人(15～50歳: 39万4,814人)であったことから、成人女性の5分の1が売春婦と批判を受けることになるが、そのうち3分の2は、20歳未満(78,962人)であると(ライアンの推定)された。大袈裟な推定ではあるが、都市における売春婦の位置が大きいものであることが窺える。ライアンの見解によると、売春の原因は、親の放任、怠惰、女性労働者の低賃金、また、洋品店でも男性を雇用し、売春宿の存在やパブや酒場・劇場などでの飲酒・音楽・ダンスの流行などもあり、男性は女性に比べて無責任でもいいという風潮が横行していること。また、ドレスや上流社会へあこがれる女性を甘い言葉でたぶらかす男性の卑劣な誘惑や売春は絶対必要だとする考え方にあったのである。上流社会の人々の中にある偏見もその原因の一つであった。貧困や教育の欠如からくる無知や惨めな暮らし、また、生れもったみだらな性格が原因であると考えていた。いかがわしい刷り物や俗悪本、猥褻な週刊誌などは、近代文明の不道德性を表面化したものであり、また、ウィリア

ム・ワッツの証言(1834)によると、女工たちの低賃金が売春以外に生活の途がないものになっているのだというのである。結婚の形態にもその原因はあった。ロンドンの場合、プレイスプレッチ・ヘミングによると、「同棲売春婦」という形態があり、結婚費用の出せない者や近親結婚をした者、相手の男が結婚したがない者、結婚の神聖を信じていない者などがその類いであったという。当時の権威力のある者たちは、私生児の母親をすべて売春婦扱いしていた程であったのである。

19世紀の労働法改正やアメリカの独立宣言や奴隷解放、選挙改正法、オックスフォード運動、植民地における勢力の縮小などを通じて、イギリス本国内外における人々の社会問題への意識が高まったという点で、イギリスという国は産業革命の先導者であった分だけ社会問題への意識が最も早かった国であったとも言える。16世紀後半～17世紀初頭にシェイクスピアが『ベニスの商人』や『オセロ』の中で人種問題を扱い、『ハムレット』、『マクベス』、『リア王』などの悲劇作品やその他喜劇作品のなかで家族の問題や男女同権を扱ったりしたのは単に優れた文学作品に特有の普遍的な価値性を秘めていたということだけではなく、観客あるいは読者であるさまざまな階級の人々に対して社会問題への意識を図っていたと解釈すれば、シェイクスピアを生んだイギリスという国は、あらゆる意味で先進国であったわけである。18世紀半ばから19世紀にかけての産業革命の時期と人生の歩みを共にしたウィリアム・ブレイクは“時代の申し子”と称されるだけあって、イギリス・ロマン派の詩人たちの中でも最も産業革命に敏感であり、下層階級の人々の気持ちを理解していたと言えよう。何によりも下層階級・労働者階級の出であって、キリスト教を信奉し、教会批判を行い、人種問題を扱った詩を書き、シェイクスピアを熟読していたからである。そんな彼の作品を通じて、イギリスの産業革命の時代を垣間見ることは社会的な面においても、もちろん文学的な面においても意義のあることであると言えるのである。

以上は、地域総合研究所の補助による書籍及び

資料を参考にまとめたものであることを断っておく。

## 参考文献

1. 『子ども観の社会史』  
北本正章著 新曜社 1993
2. 『売春の社会史』  
バーン&ボニー・ブロー著 香川檀 他訳  
筑摩書房 1993
3. 『性の歴史』  
J-L・フランドラン著 宮原信訳  
藤原書店 1992
4. 『イギリス革命の宗教思想』  
山田園子著 御茶の水書房 1994
5. 『性愛の社会史』  
ジャック・ソレ著 人文書院 1989
6. 『ヴィクトリア時代のロンドン』  
L.C.B. ソーマン著 社本時子、三ツ星堅三訳  
創元社
7. 『イギリス衰退100年史』  
A・ギャンブル著 都築忠七、小笠原欣幸訳  
みすず書房 1988
8. William Blake: *Songs of Innocence and of Experience*. Edited by Geoffrey Keynes. Oxford University Press, London, 1982.
9. *The Complete Poetry and Prose of William Blake*. New and Revised Edition Edited by David V. Erdman. Commentary by Harold Bloom. Berkley and Los Angeles, University of California Press, 1982.
10. Erdman David V. Blake: *Prophet Against Empire*. New York, Dover Publications, Inc., 1991.